



応急仮設住宅（黒坂団地）入居者による「お別れ会」

思いを聞いてほしいのだ、とあらためて感じる瞬間でした。人の心の原点、『自分を認めてほしい、理解してほしい、わかってほしい』。これを満たす場所がお寺にはあると思うのです。

このたびの大地震により、家も人の心も多くの被害を受けたのですが、今後、つねに心のより所となるようなお寺をめざし、復興に努力してゆきたいと思っています。

待ち遠しい県道の復旧 （久住 吉原敏治）

鳥取県西部地震により、日野町全域で甚大な被害を受けました。そんな中で、通勤路として利用していた県道菅沢日野線も斜面崩壊等により全面通行止めとなりました。迂回路として、菅沢ダムのまわりを通り、職場である日野町役場に通勤しております。

地震直後なかなか家に帰ることができませんでしたが、ようやく家に帰ってみると大変でした。家の中はめちゃめちゃに物が倒れて落ちていて、足の踏み場もありませんでした。幸い屋根は大丈夫でしたので安心しました。役場への通勤時間は、これまでの倍の約40分くらいかかります。でも、片側通行規制によりその時間も一定ではありません。また、朝は信号機がなかったのに、夜には設置してあるといった具合に、状況が日々変わっていきました。子どもたちの通学は、私の車で公民館まで送っていき、そこから学校まで歩いていくという毎日になりました。仕事の関係上、夜遅くなることが多くなり、また、雪が降ると菅沢ダム周辺の道路は初めてでもあり不安でしたので、昨年12月から今年3月まで4か月間、黒坂で間借生活をしました。現在は久住の自宅から通っています。

中学生と小学生の3人は、始業と終業時刻が違ってきますので、それに合わせて送迎することが難しく、翌日の送迎時刻と分担を毎晩相談して決めることに苦労しました。いつまでこんな状態が続くのか不安でしたが、先日、県道の復旧工事の説明会が開かれ、調査・工法検討に時間を要するものの、平成15年3月には開通する予定であることを聞き、安心しました。しかし、まだ1年もの間、いまの繰り返しです。できる限り早く開通していただき、通勤・通学に便利な県道の復旧をお願いします。

ボランティアを受ける立場になって (黒坂 坂出清子)

当初、「解体すべきか、それとも修理すべきか」、築百数十年という家の歴史の重みなのでしょうか。何となく心に引っかかるものがあったて決めかねていました。役場から確認の電話があり、また迷いが出てしまいました。建築の専門家や息子ともたびたび相談して、結局、修理することに踏ん切りをつけました。隣家が解体されて空き地になっていたのて、その土地を借りて倉庫を建て、家財を全部引っ越したあと、重機で傾きを直し、各部屋の柱に支えを入れ、再び傾かないようにしたうえで冬越しをしました。

3月20日過ぎにやっと本格的な着工となりました。さすがに大黒柱はしゃんとしていましたが、壁土を全部落とし柱だけになると、下の部分はかなりボロボロ。悪い柱は取替えたり添え柱をして、部屋の仕切りは4枚の襖を2枚に減して柱を立てました。壁にはかすがいで補強を入れ、工事は着々と進行しました。ようやく「これなら大丈夫かな」と思えるようになりました。仕上げはボードとクロスだけで、見た目には以前と変わらぬ姿に完成しました。いよいよ隣からの引越しです。たいへんなことです。そんなときボランティアセンターから、「お手伝いを頼まれたら？」と声をかけていただきました。初回は県の職員さん3人と、地震以降ずっとお世話くださっている渡辺さんの4人。てなれた渡辺さんの指示で、次々と荷物が家に運ばれて、各部屋は満杯となりました。2回目は、学校の先生2人と渡辺さんの3人で、あらかた運んでいただきました。今までボランティアをすることはあっても、受ける立場になったことがなく、今回はじめて皆さんのご厚意に助けていただき、この上ない有難さを知りました。

下の部屋はなんとか生活できるようになりましたが、2階は越したときのみままで未だに片付けておりませんが、木造のすすけた天井に風格と愛着を強く感じながら、満足した思いで生活している今日この頃です。

温かい心をいただいて (根雨 遠藤基一)

私は、平成12年10月6日、この日を生涯忘れることはできません。鳥取県西部地震で住宅が「全壊」と判定され、危険の赤札が貼られ、やむなく全面解体に至りました。相次ぐ余震のなか、慌しく家財を整理してたくさんの物を思い出とともに捨てました。11月1日からいよいよ解体開始。大きな重機がアームの先の鉄バサミで大屋根をくわえて下へ押しつけると、ものすごい破壊音で家が泣きました。私も心の中で泣きました。しかし、震災直後からお手紙やお電話での数々のお見舞いや励ましは本当にありがたく、ともすれば落ち込みがちな気持ちを奮い立たせてくださいました。地震の翌日から片付けに駆けつけてくださったたくさんの友達、ボランティアさん。「うちの借家に入らないか」と言ってくださった近くの友人や、「わたしの実家が空いているから、家財を入れたら」と言ってくれた小学校の同窓生。また、家の再建は不可能だと思われたとき、鳥取県の片山知事さんの「住宅再建には300万円を助成する」とのご英断にはたいへん勇気づけられました。ともすれば弱気になりそうな私を支えてくれた家内や、たくさんの温かいお心のお陰で、平成13年7月、家が完成し入居できました。このときにも、ボランティアの皆さんにたいへんお世話になりました。

新しい家に移って間がないので、木の香り、畳の匂いなどは初々しいけれど、何となくよそよそしいのは、まだ暮らしの手垢がついていないからでしょう。

数多くの方々からいただいた温かいお心を、これからは僅かずつでも社会や地域の皆様にお返ししていかなければ…と話し合っているところでございます。

震おさまれど、災おさまらず…しかし (神戸元気村 吉村誠司)

ニューヨークで崩壊したビルのガレキを見た時、阪神大震災直後の神戸のあの日を思い出した。同じように人が造ったものが、無情にも崩れている。人間は3～4日以内に助けないと、命が危ない。私が東京から神戸に向かい、焼け野原に立ったのが4日目の夜中だった。ほとんどすべてがガレキと黒こげの街。倒壊した建物には生命は無かった。「その時」に間に合わなかった後悔の思いが込み上げてきた。燃え尽きるまで焼けた火事の匂いが鼻の奥に記憶として残った。長田区では、死者の三人に一人は焼け野で遺骨となっていた。そして、その中から逃げ出して来た人との出会い、語り合い、神戸に残って支援を続けよう、そうしないと自分に嘘になる。次の災害では、この失敗を繰り返さないようにすることが、かけがえのない数千人の生命から学んだことだった。この思いが、私を鳥取県に運んだ。まさに今、「動くとき」だった。そして、あれから1年の月日が流れた。あの震災の揺れを体験した人は、毎日が、様々なあの日の記憶との戦いだと思う。台風が来て、風で家が揺れるだけでも、「ドキッ」とする体験は身体に染み付いて忘れない。「震おさまれど、災おさまらず」という言葉を私は時々使う。建物は直っても、義援金をいただいても、心の傷は癒えることはない。

7年目の神戸でも、昨日のように震災を覚えている人が多い。困ったり、不安になった時に話せる人や団体があればありがたい。日野町では、そんな人間関係があった。そこには、深い人の絆が、あれほどの災害を乗り越え、被害を最小限にしていたことに気づいた。それは、神戸市長田区での人々の動きと似ていた。顔と名前を知っているという関係が安否確認を早め、火が迫り来る前に、少しでも助け合うことができた。最初の「ボランティア」がここにもいた。これは、仕事でもお金でもない、国境を越えた自然に動ける原点の「人助け」の世界だ。震災直後、自治会や近隣の方々、徹夜続きの役場や消防団の方々は、誰も自分たちがその「ボランティア」とは言わないだろう。県外から駆けつけた多くの人々が、その「エネルギーを助ける心」に出会った。文面に出てこない、当たり前前に動いていた多くの人達に大きな拍手を送りたい。そして、地球が教えてくれたことをつないでいこう！



いち早くかけつけボランティア活動に当たる神戸元気村の皆さん（下榎地区で）

三区がわら版

NO. 141

12.12.30

編集長 遠藤基一
発行所 根崎3区自治会
池原和夫

そのとき、あなたは

三区住民アンケート

平成17年10月6日午後7時30分、鳥取県西部地方を大地震が襲いました。震度6強、マグニチュード7.3は阪神淡路大震災を上回るものでした。

しかし幸いなことに昼過ぎという時間帯で死者ゼロ、火災の発生もありませんでしたが、震源とされる日野町では、家屋の全壊や半壊などの被害が続出し、水道の断水や鉄道・道路の不備などライフラインに多大の被害を受けました。

今回「三区がわらばん」ではそのとき、あなたはどのようにアンケートを行ない、匿名から回答を得ました。おたずねしたのは①地震の時にどこに居られましたか ②その時の状況について ③「あの地震だ」と、さだかに感じられましたか ④震災後の町政にのぞむこと 以上四点です。

このアンケートが今後何らかの形で生かされれば、幸甚に思うものです。(順序不同)

五十才代 女性

①家 ②ゆれが激しく、動く事が出来なかつた。外に出て、近所の方と一緒にいた ③布団をかぶって、④日野町がなくなってしまうのではないかと心配。

七十才代 女性

①家 ②ゆれがひどく、動く事が出来なくて、じっとしていた ③その場ですわりこんでいた ④いままで通りの日野町にもどってほしい。
五十才代 男性

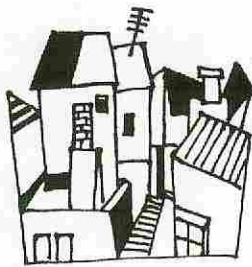
①家の車庫に居ました ②一瞬、北朝鮮のテポドンが落ちて来たのかもしれない。最初の不気味な「ゴ」と言った音は、何とも覚えないう音でした。もちろん立つていられたんですけど、③車庫より外へ出ましたが、ここでこれだけの揺れだったので震源地はものすごい被害だろうと考えたのですが、まさか日野町が震源地とは!!

④町の騒様には連日連絡たいへんご苦勞さまでした。日野町の人口が少なくならない様に、いろいろな方面

より助成して下さい。

六十才代 女性

①自宅居間 ②孫(二才)は隣室で昼寝をしていた。私は昼食の後片付を仕舞い、ホッと二息、机に向って新聞を開き、静かな一時を過ごそうとしていた。③いつかの地震とはゆれ方が大きいなど思い、すぐ隣の孫の所へ行かなければ、と立ち上ろうとしたのですが、横ゆれがひどく立てられないので、四つん這いにて隣室へ



運良く孫は目が覚め平床の上にかぶさる様に、暫くして周囲の上を見ました。(タンスの上など)地震がよくあるもので、いつも様々するとき、部屋を中心に、物が落ちてもどかない位置に孫が居ていました。

防災無線にて火の元栓を止める様に放送があり、立つて炊事場に向いました。食器その他がすでに散乱し、用心しながら止めました。④神戸震災後であり、町の対応も早く、無線での放送がどんなにか力強かつ

たか知れませんが、私も火の元の放送でハッ!!と気づいたことでした。過疎の小さい町のことですから、とても町政だけにたよれないので、県・国をあげて対応して欲しいと思います。又住民は町内一つ家族という意識をもって、お互い協力し合う事の大切さをより強く感じた出来事でした。

四十才代 女性

①台所 ②なし ③テーブルの下にもぐりこんだ。しばらくしてからガスの元栓をしめた。④震災により税金が上がるのではないかと不安です。
三十才代 女性

①自分の部屋(休憩中) ②パソコンを置いて、最初は「あ、地震だー」という感じがからりどうしよう、どうしよう、とパニック状態におち入り、頭の中真っ白という感じになった。とりあえず外に出ると近所の人ほとんどが外に出ていて、大変なことになったなと思った。③パソコン中だったので、パソコンを押えて、ゆれが治った時点で外へ出た。何を持って出ると考える余裕がなかった。④弱者の味方になってほしい。皆が安心して生活していただけるようバックアップしてほしい。

①畑園科 ②病院の窓が割れていた。板本理髪店の建物が大きくゆれていたのがよく分かった。ゆれが中々おさまらないので、普通では無いと思ったが、まさかあれが大地震とは思わなかった。畑さんから出て家の方を見たら、ケムリが出ていて異様な雰囲気だった。③何も出来な

五十才代 男性

(二ページへつづく)



「立ち上がり日野町、」
二〇〇一年は復興元年だ。
悲しみの中にも喜びは有る。
10月6日の大地震お見舞い申し上げます。
「神戸も震災から五年もたち、確かに建物は復興できたが、肉親や友達近所の人をなくした悲しみは一生消えない」そういえば、5年前の神戸にボランティアで出勤した時、玄關に花とお供物が有ったの思い出した。さうだ。確かに日野町は建物、道路等多くの物的被害を受けたが、死者ゼロは正にギョギョだ、有難いことだ。悲しみの中にも喜べる点は多くある。喜べる点を数多く見出し、元氣を出そう。私自身も、今年日野PTAの会長を勤めさせて頂いているが、生徒が無事であったことが何よりうれしい。また自衛隊、消防団、数多くのボランティアのみならずをはじめ、全国から多くの真実を運載した日野町。二〇〇一年は復興元年だ。新世紀二一世紀だ。町民一人一人、今何が出来るか、何をすべきか、よく考え、「ぶ」から芽が出る。如く、一日も早い心の復興をなし、立ち上がりましょう。とが全国から寄せられた真実に対する恩がえした。泣いてしまるか。(火水風)

コミュニティ活動記



炊き出し訓練など防災ボランティアを体験（黒坂地区コミュニティ推進協議会）

活かされたコミュニティ活動（黒坂地区コミュニティ推進協議会会長 牧智也）

電話をかけようとして座敷を歩いて突然尻もちをつきました。気がついた時は、手と足で這っていました。揺れが治まってから、黒坂上三区の自治会長でもあったので安否確認に区内を一巡。途中他の自治会長さんと出会い、集まれる自治会長だけでも、役場黒坂支所へ集まろうと相談しました。全部の家が被害を受けていましたが、幸いに負傷者もなく、隣近所の人と家の後ろの畑などに避難をしておられる高齢者の方も多く、ホッとしました。巡回途中に何回か余震がありました。

支所で聞くと、根雨地区の様子を聞くがはっきりしないし、役場本庁との連絡も取りにくく、土砂崩れで道路も通行不能のようだという事なので、黒坂連合区会長や他の自治会長、公民館館長らと善後策を相談することになりました。避難所は平成5年にコミュニティ推進協議会と役場で取り決めた場所にする事を確認し、独居高齢者の避難所は和室の大きい部屋のある町老人福祉センターに決定。町公民館を避難所として指定されている自治会の方々が握り飯を作られ、他の避難所にも配給する予定だとのことでした。その間時々余震があり、日暮れも感じてきました。

自治会に帰って連絡し、それぞれが必要品を持って避難所へ。独居高齢者一人の方が、家の鍵が閉まらないから避難所には行かないと言われ、他家でも同様なので夜回りをするからということで、余震の中を避難してもらいました。避難所で臨時常会を開き相談した結果、元気な人で夜回りをする事となりました（8日まで実施）。

配給された握り飯を夕食とし、翌7日の朝も握り飯が配られ、これが朝食となりました。情報があまり入らない状況下では、この握り飯がどんなに精神的にプラスになったことか、ありがたいことでした。このようにすぐ握り飯ができたのは、平素独居高齢者の給食サービスという土台があるからだという人もありました。



黒坂地区コミュニティ推進協議会では独居高齢者への給食サービスをしている



いざという時にどう助け合うか、日ごろからさまざまな訓練を実施

平成4年6月に「(旧)自治省の事業指定を受けないか。3年間の指定で、年間300万円が交付される。この期間中に各種事業を行い、それらを踏まえたうえで、将来の地区の振興計画を策定してほしい」と、町の担当者から打診がありました。本町は他町に比べて地域振興のための諸施策が大きく遅れていました。それならばそのための突破口にしたい。さらに、町の将来構想のための指針になるべきものを作りたいという気持で、指定を受けたいと思ったのです。ただちに地域内全自治会の協力を得て、「爽やかで温かなふれあいのまちづくり」をテーマに設定して、住民全員が参加できる体制づくりを進めました。

(旧)自治省のモデルを参照して①地域防災や交通安全の分野②独居高齢者への給食サービスなどの福祉③子ども達の健全育成と郷土愛の醸成④環境美化活動⑤伝承芸能の継承活動などの文化振興⑥地区体育祭ほかの体育活動⑦機関紙の発行や地域リーダーの育成の分野⑧行政と協力して各種事業を実施するという、8分野を中心に活動することを設定しました。これにより各種の事業を展開するなかで、より現実に即した組織を模索しながら、平成7年度に下記の4分野にまとめ、組織の改編を行いました。

(1)人材育成部－青少年の育成と文化振興

(2)ボランティア部－独居高齢者への給食サービス、歳末の餅サービス及び福祉施設等におけるボランティア活動

(3)環境部－地区内美化活動及び地域防災活動、交通生活安全活動等

(4)ビジョン部－機関紙の発行とともに、今後のコミュニティ活動の方向性の研究

黒坂地区は藩政期から明治初期にかけて数度の大火を経験しています。また、近年付近を震源とする微弱地震も頻発していたので、これらの記憶が根底にあったとも考えられますが、会員一人ひとりが、いざというときにどう助け合うかということをも自然な形で意識しあうことが必要だと考えました。また、これらすべての活動の基本は、住民一人ひとりの顔が見えるものでなければならない。向こう三軒両隣の付き合いを深めつつ、とりわけ高齢者の安全なくらしを支える体制をつくる必要がありました。

このため平成4年度から12年度にかけて、消防署員指導による消火訓練。独居高齢者宅に消火器配布及び煙突掃除。積雪時の除雪作業。避難誘導看板の設置。救命心肺蘇生法講習会の開催。「防災のしおり」配布。炊き出し訓練を陸上自衛隊と共催。今回の震災経験を踏まえて防災グッズを配布するなど、さまざまな活動を行いました。

これらと平行して、地域内の家屋の間取りや昼夜の家人の居場所や連絡先などを事前に把握する活動をはじめ自治会も出てきました。そして、災害が発生したら、まず家族の安全確保、つぎには近隣の高齢者や体の不自由な人を誰がどう助けるかというシミュレーションを重ねていったのです。

今回の地震では、その規模に比べて死者もなく、火災も発生することもなく、幸運な面があったといえますが、避難所での自主的な炊き出しや夜警活動、自治会長や役員をはじめ住民の落ち着いた行動、近隣の協力し合う姿など枚挙に暇がありません。

9年間積み重ねてきた一つひとつの活動が、今回の震災で直接どう生かされたのか、学術的な検討はしていないので、因果関係を明確にはできませんが、それらが総合的に機能して、住民の防災意識と支え合う姿勢を作り出したことは確かです。

現在、黒坂地区ではさらに過疎化が進行するとともに、少子・高齢化という状況のなか、祭礼や子供会などの諸行事ができない、地域活動が成り立たないという自治会も出現するなど、まさに“高齢者の世話を高齢者がする”という状況です。震災復興と地域振興という二つの課題をかかえて、さらに困難な状況が招来すると思いますが、“このまちに生まれてよかった。住んでよかった”と実感してもらえるようなまちづくりをめざし、会員(住民)全員で努力していきたいと思います。



今回の震災をふまえて黒坂地区内自治会に防災グッズを配布

日野町震災シンポジウム



地震の体験を活かして“まちづくり”を進めようと『日野町震災シンポジウム』を開催（平成13年5月26日・日野町文化センター）

『日野町震災シンポジウム』の記録集が、京都防災研究所から発行されます。また、本書もあわせてホームページに掲載されておりますので、ご覧ください。

ホームページ

http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/web_j/kyodo/kyodo13/13k-01.html

日野町震災シンポジウム雑感

鳥取大学工学部土木工学科教授 西田良平

5月26日（土）に開催された日野町震災シンポジウムは、被災された人々と研究者が一堂に会して開かれた研究会です。日野町文化センターに多くの人々が集まり、13時から時間を延長して18時過ぎまで熱心な議論が続きました。

研究集会の目的は、研究者サイドから研究成果の報告と議論を行うとともに、一般住民・自治体・消防・学校・病院・報道等からの参加を募り被災直後の災害対応と生活再建過程の実態・問題点を明らかにし、山間過疎の地域性を考慮した社会的見地からの議論を通して復興、生活再建への指針を地域住民に示すことを目的として開催された。

日野町震災シンポジウムは導入部から素晴らしい。被災された住民の方々は何を感じ、どのような行動をしたのかということから始まっている。そして、各分野の専門家・研究者が調査・観測・研究をして、被害の実態を明らかにした結果について、具体的に明らかにしている。また、それだけに留まらず、今後の町づくりへと考えを広げていった。

セッション1「その時みんなは・・・」は、コーディネータを米子高専の熊谷昌彦さんがされ、矢田貝さんが被災した自治会の役割として、地域住民の安全確保を優先された姿勢が示され、このシンポジウムの流れを作られた。地震直後の住民の行動を述べられ、いろいろな問題も提起されました。ボランティア活動についての細田さんも体制作りと運営をされ、黒坂小学校の青戸校長は児童の安全を最優先した地震時の避難対応、帰宅させるための苦勞などについて話された。地域の中心としての学校の役割と問題点を話された。枝原さんは被災地の病院が抱える問題を指摘された。そして水が出ない、電気が切れたことが一番大きな問題であることを話された生田さんは地域の中の保健婦の活動の大切さと大変な負担があることを知らされ、日頃の活動が緊急時に生きてくること、そして介護保険利用者などについての災害時の問題点なども話された。

地震を経験した者が感じたこと・行動したことが素直に述べられ、日野町をはじめとする鳥取県西部地域の地域のコミュニケーションがあり、それが大変重要な役割を果たしたことが、それぞれが自分の役割を認識し、実行したこと、またそれ以上の行動をしたことを知ることができた。しかし、この中にあるいろいろな問題点も浮き彫りされた。それらについては、この報告書の中で指摘されている。

セッション2「被害はこうだった」は鳥取環境大学の北原昭男さんのコーディネータの元で、研究者の立場から被害の調査に基づく報告があった。滋賀県立大学の小林さんと広島大学の玉井さんからは木造建築物被害について、日野町下榎・黒坂地区と鳥根県伯太町の被害調査の状況が示され、建物敷地と被害程度との関連、表層地盤と被害の関連などの報告があり、京都大学の林さんは墓石の転倒率から、日野町の地表面での最大地震動は80～100cm/sにもなり、阪神・淡路大震災と同程度の建物の小破率であったが、倒壊率が非常に小さかったことに言及され、木造建物の耐震性（変形能力）が高いことを報告された。

鳥取大学の藤村さんは液状化被害が埋立地に集中したこと、発生のメカニズムの説明があった。鳥取大学の榎さんは震源地付近の斜面災害について調査が報告され、道路・鉄道の不通が長引いたこと、斜面崩壊のメカニズムについても触れられた。山間地での大きな問題である農業災害は今まであまり話題にならなかったが、鳥取県の河原さんは過去30年間では農業災害で

は最大であることが報告され、家屋災害が優先され農地などの被害対策が後回しになっている現状、個人負担のあり方、2次災害への対応などの問題点が提起された。

質疑応答では、木造住宅についての質問が会場から多く寄せられ、パネリストが丁寧に回答していた。耐震性の優れた木造建築物は豊かな森林資源と優秀な棟梁・大工の存在があり、この文化を守ってきた住民の意識が大災害に至るのを防いだことが判った。時間が足りなくて十分な議論ができたとは言い難いが、地震災害を被災住民と考えるということはある程度果たすことが出来た。

セッション3「今回の地震のからくり」 京都大学の梅田さんが鳥取県西部地震のメカニズムについて、地震前の地震活動から地震発生の断層運動のメカニズム、余震活動の状況、地震予知に関わる問題点など判り易く話をされた。

セッション4「安心できるまちづくり」 滋賀県立大学の藤原さんをコーディネータとして、今までの話を踏まえて、今後安心できるまちづくりのために、大切なものはなにか、そして何を考えて行かなければならないかを、鳥取県、日野町という地域の特性から考えて行くことが議論された。鳥取県の原さんから、地震発生時の情報収集と情報伝達の話から、一方向だけの情報伝達では不十分で、双方向のシステムを日常的に構築することが必要であることが提示された。日野町の生田さんからは被害状況、被害対策について具体的に報告され、自主防災会等による行政と連携できるシステムとしての情報収集と伝達の問題が提起された。西伯町の坂本さんから行政からの多岐にわたる提言があり、災害時の専門家の不足、危機管理の重要性などの提言があった。テクネ研究所の長谷川さんから日野町の活性化として、町民による組織作りとその成果について報告され、方向性が示された。パネリストとして、理化学研究所の牧さんは阪神・淡路大震災の事例を引用して、住民の日常の生活、地域のコラボレーションの大切さを提言されました。鳥取短期大学の浅井さんは地震前に調査された地域での高齢者の問題を地震後に調査された研究について報告され、住宅再建の問題と地域社会の問題について報告された。広島大学の石丸さんは景観の変容、生活の変容の側面から、天災の多方面な影響評価が必要と指摘された。時間が不足していたが、今後の町づくりへの多くの問題の提起と方向性の一部分を提示・報告することが出来た。行政と住民が一体となって取り組むことの重要性は示すことが出来た。

日野町震災シンポジウムは、今までの研究会とかシンポジウムとは少し違った視点で構成されている。この試みは成功であったと思っている。研究者は被災地の中で、被災住民と同じ目線で話し、議論が出来た。地震時の住民がそれぞれ自分の責任を果たすことに多くの時間を費やし、また助け合って行ったことが報告され、研究者が調査・観測した結果が住民の立場で議論され、今後の町づくりに生かされることであろう。

最後に、NHKの藤吉洋一郎解説委員には、シンポジウムの構成をはじめ多くの助言をいただき、ゼネラルコーディネータとして配慮いただいたことに感謝している。

2000年鳥取県西部地震の特徴

2000年10月6日午後1時30分、西日本は大地震の揺れが多くの人々を驚かせ、被害を発生させた。震源は鳥取県西部、西伯町の地下10kmとされたが、地震を発生させた震源断層は日野町を通り、最も強い地震動が日野町を襲った。日野町は下榎、下黒坂をはじめとして、全域に被害が出た。この地震の特徴を今までの地震活動とともに述べたい。

我国において、地震の記載が最初にあるのは、日本書紀〔養老4年(720)〕允恭天皇記の5年7月14日(西暦416年8月13日)の河内地震である。それ以後、記録されている被害地震は400を越えている。そして、山陰地方でも今まで4つの大地震が記録されている。昔から、地震はその原因が判らず、「地下の大なまず」の仕業にされ、神業・祈禱・陰陽道などで天変地異として恐れられていた。しかし、最近、プレートテクトニクス説で説明される地球内部での現象として、地震のメカニズムが明らかにされている。特に、日本列島周辺の地震活動は海のプレートと陸のプレートの相互作用で説明されている。

2000年鳥取県西部地震(平成12年10月6日)は山間部に発生した地震でありながら、鳥取県西部を中心に大きな被害を出している。しかし、亡くなった人がない、火災の発生が0件、激しく揺れたのに全壊家屋が少ないなど、特筆すべきことである。鳥取県では、7月に米子市で災害訓練を実施していたので、マニュアルに従って、知事のトップダウンでの災害対応・対策が迅速・適切に実行された。

震度はその場所の揺れの強さを表すもので、大きくなるほど被害が大きくなる。今回の地震の主な震度を以下に示す。

- 震度6強：日野町、境港市 6弱：西伯町、溝口町
- 5強：米子、新見、岡山哲多、落合、美甘、香川土庄
- 5弱：松江、東郷、岡山、玉野、福山、徳島、観音寺、兵庫津名
- 4：鳥取、出雲、倉敷、広島、高松、松山、高知、大阪、神戸

日野町では最大震度を示している。そして、震度の大きな地域が岡山県から四国まで、南側に広がっている。被害は震度6の地域に集中している、マグニチュード(以下「M」で表記する)7.3の地震にしては被害が少ないのは、発生時間が午後1時30分、震

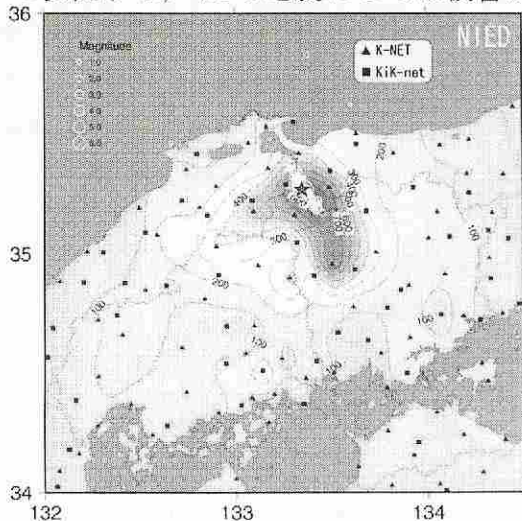


図1 鳥取県西部地震の震度分布

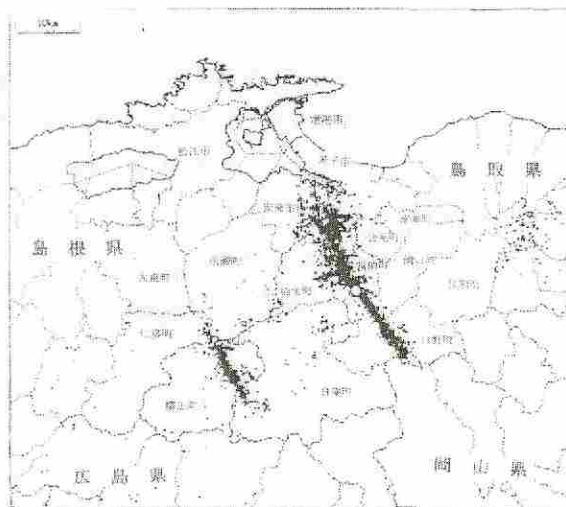


図2 鳥取県西部地震の余震分布

源が山間部で激震域も都市部でなかったことが原因の1つである。被害の種類は、家屋の倒壊、山間部での斜面崩壊、落石などの地震動による被害と沿岸部での液状化現象による地盤災害がある。前者は日野町黒坂・下榎地区、西伯町、溝口町などが大きな被害を出したが、地盤が比較的良かったために、全壊になるべきところが半壊になっていると推察される。しかし、山間部を走る道路、鉄道は大きな被害を受け、不通箇所が多く出た。境港市、米子市では都市型の被害が出ている。港湾岸壁の崩壊、マンホールの抜き上がり、電信柱の沈下など、またライフラインの被害が随所に見られる。

本震は西伯町の地下10kmの所を震源として、震源断層は北北西-南南東の走行で、約20kmの長さの左横ずれ断層を示している。余震活動は、震源断層に沿った細長い帯状の地域に集中している。余震活動も南半分と北半分で様子が異なり、最大余震M5.0が北の端近くに発生している。余震活動は順調に減衰している。そして、誘発地震群が2ヶ所あり、割算型の分布をしている。南西域にある日南-横田町ではM5.5の地震が発生している。北東域の大山の下にも小地震が発生している。

鳥根半島のこの地域は880年の出雲地震(M7.0)以来1,100年間地震が起きていない。明治以来、日本海沿岸に沿った大地震は浜田地震(1872)、北丹後地震(1927)、鳥取地震(1943)と発生しているが、この地域で起きていない。最近の活動では、1977年(M5.3)、1978年(M6.1)と三瓶山周辺で発生し、小地域ながら被害を出し、温泉の増水、泉温の上昇など異変を発生させた。この地域の活動は最近でも継続されている。広島県北部も群発地震が発生する地震活動域である。

鳥取県中部の地震(1983年、M6.2)、そして1985年には大山付近の地震(M4.9)が大山山頂から数km東に発生した。その後、1989年からの鳥取-鳥根県境地域の活動である。1991年には鳥根県東部の地震(M5.9)が発生した。また、1983年からの地震活動は東から西へと地震活動が移動し、これらの中地震の発震機構はいずれも左横ずれ断層型で、地殻応力はほぼ東西方向の圧縮力である。今回の地震の震源断層、地殻応力はこれらと一致している。鳥取県西部地域では、1901年、1925年、1955年にM5の地震活動があり、約30年間隔で活発化している。11年前から、鎌倉山南方活断層に直交する地下断層の地震活動として、1989年にM5.3、M5.4、1990年にM5.1、M5.2、M5.1、1991年にはM4.6、1997年にM5.2と、今回のM7.3の地震と同じ震源断層で発生している。

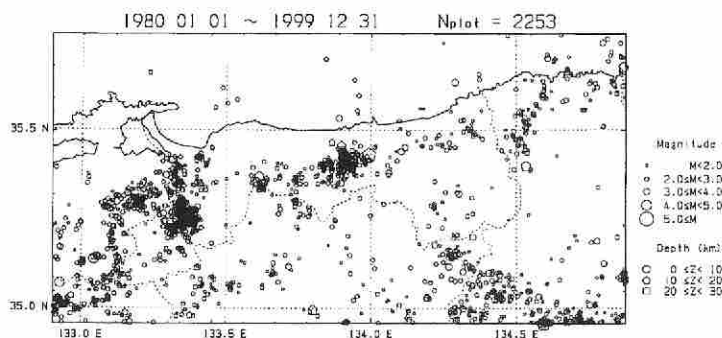


図3 鳥取県周辺の地震活動

- ①1983年(M6.2) ②1985年(M4.9) ③1991年(M5.9)
- 鳥取県中部地震 大山付近の地震 鳥根県東部地震
- ④1989,1990,1997年鳥取県西部群発地震

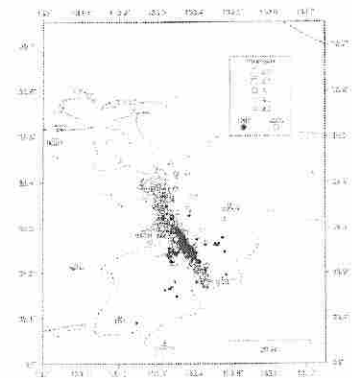


図3 鳥取県周辺の地震活動

- 1989年からの地震分布(●)
- 2000年鳥取県西部地震余震(○)

山陰地方では海岸に沿って大地震が発生している。880年出雲地震は出雲風土記に記載されている地震であるが、震央の位置が判らず、以前は出雲大社の付近（鳥根半島の西端域）だとされていたが、現在では、出雲国府の置かれていた東出雲町が震央だとされている。鳥根県東部は1100年以上大地震が発生していなかったため、地震空白域と考えられ、特定観測地域に指定されている。今回の地震はこの空白域の東側の活動域で発生している。鳥取地方の微小地震分布で見られるように、海岸に沿って地震活動帯があり、1943年鳥取地震(M7.2)はこの活動帯の中に発生している。しかし、今回の地震はこの活動帯に直交する地震で、震源断層も約20kmである。

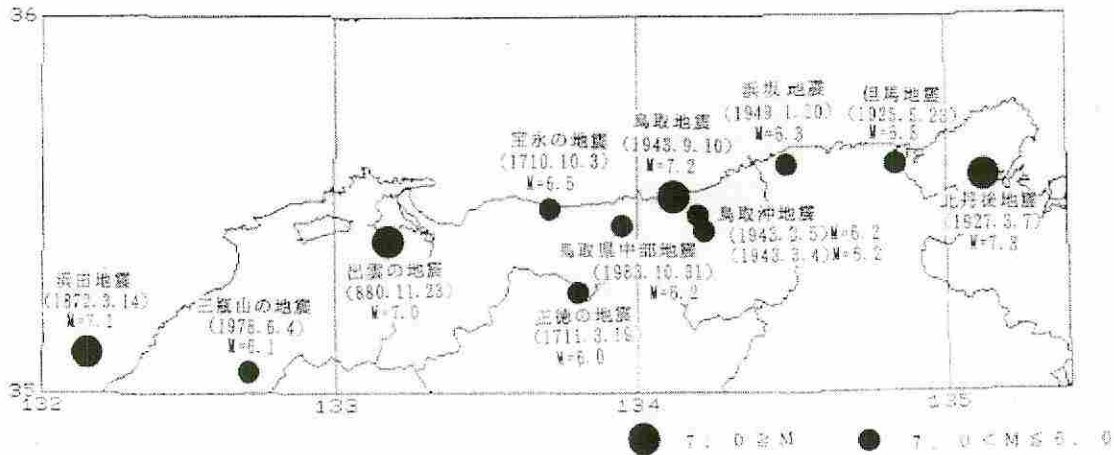


図5 山陰地方の歴史被害地震:880年の出雲地震
大地震:浜田地震(1872、M7.0)、北但馬地震(1925、M6.8)、北丹後地震(1927、M7.3)、
鳥取地震(1943、M7.2)、鳥取県西部地震(2000、M7.3)

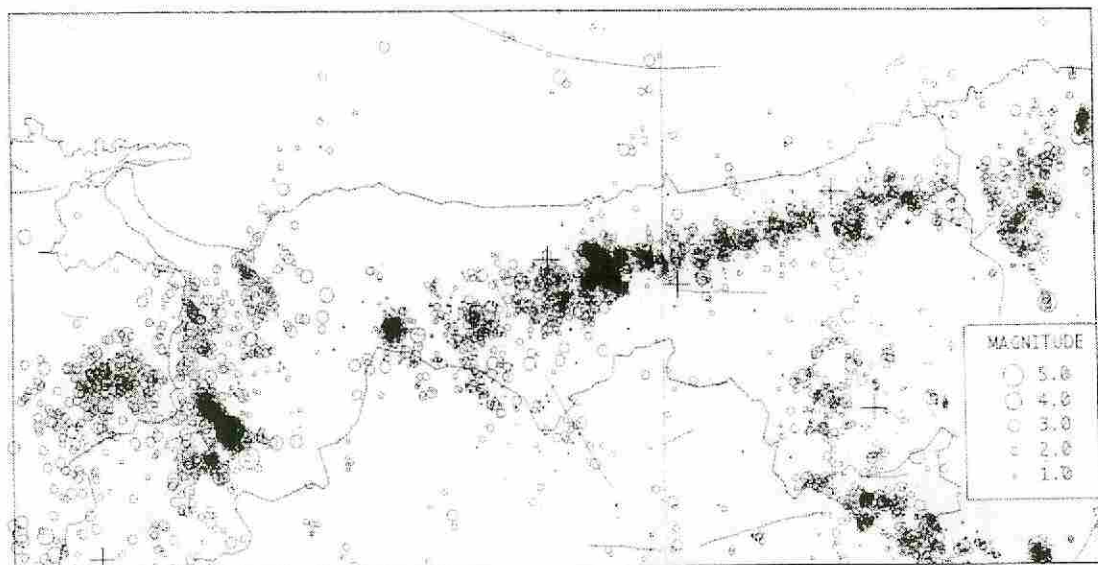


図6 鳥取県の微小地震分布:東部・中部では帯状に発生している。西部では、鎌倉山南方活断層に直交する断層系の活動があり、2000年鳥取県西部地震が発生した。

日本列島及び周辺の地震の特徴（補足）

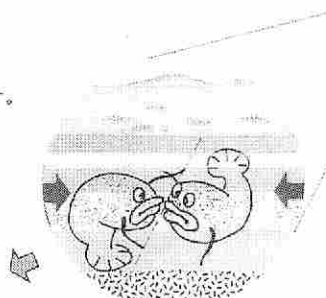
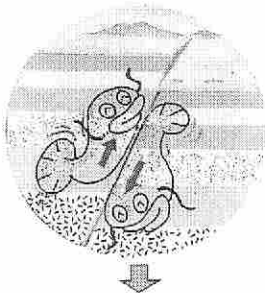
日本列島全体の地震活動は、プレートテクトニクス説で説明することができます。日本列島周辺のプレートは、海のプレートとして太平洋プレート、フィリピン海プレート、陸のプレートとしてはユーラシアプレート、北米プレートがあり、4つのプレートの相互作用によって日本列島の地震活動、火山活動などが説明される。日本列島を2つの地域に分け、東北日本弧、西南日本弧としてその特徴を見る。東北日本弧はプレートの潜り込んでいる典型的な特徴を備えている地域です。西日本（西南日本）では、ユーラシアプレート（日本列島）の下へ海のプレート（フィリピン海プレート、太平洋プレート）が潜り込んでいます。

被害地震は2つのタイプが考えられ、1つは海のプレートが陸のプレートの下に潜り込むことによる海溝（あるいはトラフ）に発生するプレート境界の巨大地震です。広範囲の地震動被害と津波災害が発生するM8クラスの巨大地震で、南海地震(1946年、M8.1)、東南海地震(1944年、M7.9)です。

他のタイプは内陸地震といわれ、M7クラスで都市の近傍で発生すると大きな被害を出す地震です。鳥取地震(1943年、M7.2)、兵庫県南部地震(1997年、M7.2)、そして鳥取県西部地震などである。プレートの移動によって、地球内部に歪エネルギーが蓄積され、限界に達すると地震を発生させて解消する。その時、震源では地下断層がずれ、震源断層の形成される。これは地域に作用している地殻応力と地下の断層系に関連している。陸地域の地殻上部に発生する時は地表面の活断層と関連し、地震断層が地表面に現れる。

内陸で起きる地震

太平洋プレートは大陸プレートの地殻を押し縮めようと動いています。活断層のような地殻弱部では歪が徐々に増大します。

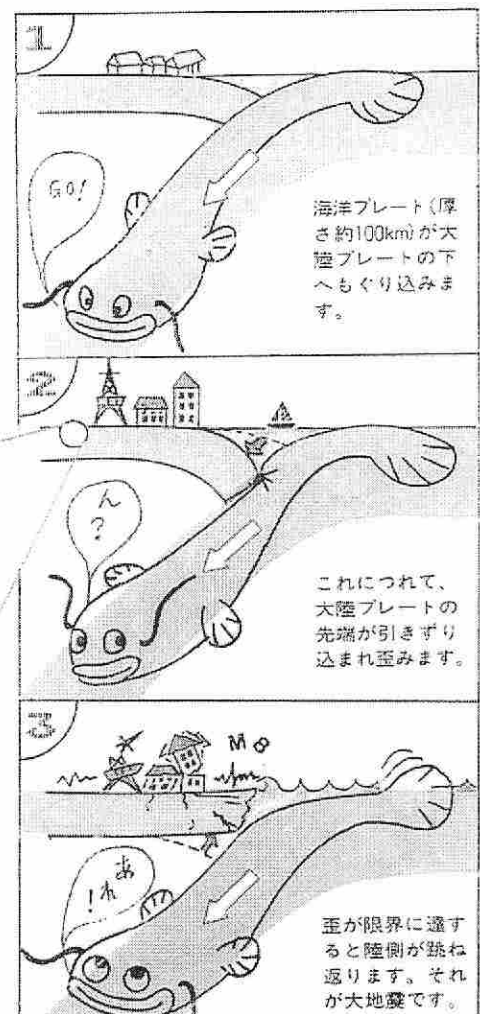


歪が限界に達すると地殻弱部は一挙に破壊し、大地震になります。
歪が消えてしまえば当然地震は起きません。

内陸地震

小さいなまが動く（M7クラス）

海底で起きる巨大地震



プレート境界の巨大地震

巨大な鯨が尻尾を動かす(M8)

日野町震災シンポジウム開催要項

1. **目的**
鳥取県西部地震において、日野町は県下でも最も大きな被害に遭った状況の中で鳥取県をはじめ県下市町村、並びに多くのボランティアの皆様等の支援のもとに、行政町民一体となって生活復興再建に向けその歩みを始めた昨今です。
震災後、本町には理工学及び社会学の見地から多くの研究者が来町され、住民の生命、財産を守り、生活の基盤を維持するための方策等について調査、研究が行われました。
こうした研究成果を地域住民、自治体等関係団体の皆様に報告し、被災関係者と議論を交わすことにより、今後の災害対応、生活再建や地域振興に活かすことを目的とします。
2. **主催** 京都大学防災研究所・日野町・日野町議会
3. **後援** 日本自然災害学会・鳥取県・鳥取県西部町村会
報道関係各社
4. **開催日程** 平成13年5月26日(土) 12:40~17:55
5. **開催場所** 鳥取県日野郡日野町根雨(JR根雨駅前)
日野町文化センター
6. **テーマ** 「鳥取県西部地震の体験を活かしてまちづくり」
7. **参加者** 研究機関(学会関係者 約20名)・地域住民
自治体・消防・学校等関係者
8. **参加者数** 350人程度
(文化センターに入場できるのは250人、それ以外は隣接の日野町役場、日野町山村開発センターで生中継によるテレビ参加となります。)
9. **参加費** 無 料
10. **参加方法** 〒689-4503 鳥取県日野郡日野町根雨101
日野町役場総務課で入場整理券を交付予定
電話 0859-72-0331 FAX 0859-72-1484

プログラム

司 会	松波孝治(京都大学防災研究所) ゼネラルコーディネーター 藤吉洋一郎(NHK解説委員)
開 会	12:40~12:50
あいさつ	西田良平(鳥取大学工学部) 生田秀正(日野町長)
セッション1	12:50~14:20
「その時みんなは……」	
コーディネーター	熊谷昌彦(米子工業高等専門学校) 矢田良勝(鳥取県連合区会長・民生委員)
モデレーター	田耕治(日野ボランティア・ネットワーク) 山 哲誠(新日本新聞社編集制作局報道部社会担当) 青戸哲範(黒坂小学校・校長) 枝原瑞江(日野病院総看護婦長) 生田直子(日野町保健婦) 下 文 弘(鳥取県消防防災監) 武本和之(鳥取県西部広域行政管理組合消防局) 植田俊幸(鳥取大学医学部精神科)
パネリスト	小林正実(滋賀県立大学環境科学部) 玉井宏章(広島大学応用工学研究科) 林 康裕(京都大学防災研究所) 藤村尚尚(鳥取大学工学部) 櫻村明潔(鳥取大学工学部) 斜 災 害 河原正彦(鳥取県農林水産部農政課長)
セッション2	14:30~15:50
「被害はこうだった」	
コーディネーター	北原昭男(鳥取環境大学)
パネリスト	木造建物被害の特徴 建物被害と地震動 液状化被害 斜面災害 農林業被害
セッション3	16:00~16:20
「今回の地震のからくり」	
パネリスト	梅田康弘(京都大学防災研究所地震予知研究センター)
セッション4	16:25~17:25
「安心できるまちづくり」	
コーディネーター	藤原 豊(滋賀県立大学環境科学部)
モデレーター	原 生田秀正(鳥取県日野総合事務所福祉保健局福祉総務課長) 坂本昭文(西伯町長)
パネリスト	長谷川泰治(テクネ研究所・所長) 牧 紀男(理化学研究所地震防災フロンティア研究センター) 石丸紀興(広島大学大学院工学研究科) 浅井秀子(鳥取短期大学)
まとめ	17:35~17:50
パネリスト	藤吉洋一郎(NHK解説委員) 西田良平(鳥取大学工学部)
閉 会	17:50~17:55
パネリスト	梅 林 豊(日野町議会・議長)